

講演大会委員会

講演大会委員会委員長 御手洗 容子*

講演大会委員会では、金属学会の主要活動の1つである講演大会の企画や講演大会申込数・聴講者数の動向の検証により、会員にとって魅力ある講演大会を目指している。2016年までは分科会と呼ばれる組織の中で、講演大会については「講演会・講習会事業」として、研究会など学会活動の活性化につながる活動については「調査・研究事業」として議論してきた。2009年に、「講演会・講習会事業」は各分科の幹事以上で構成される「講演大会企画委員会」と委員全員で構成される「講演大会委員会」に分かれ、「調査・研究事業」も同様に、各分科の幹事以上で構成される「分科会企画委員会」と委員全員で構成される「分科会委員会」に分かれた。「分科会企画委員会」と「分科会委員会」は、2018年にさらに「調査研究推進委員会」と「調査研究委員会」と名前を変え、現在に至っている。

講演大会の中で重要なものが、講演のセッション構成につながる専門分野である。2017年度まで、金属学会の中で「分科」という言葉を使って分類されていた。これまで何度か大きな改革が行われてきたが、私の記憶にある改革は44代花田修治委員長(東北大)及び45代村上正紀委員長(京大)の下で検討され、2001年春期大会から適用された。それ以前は、金属材料における基礎的な現象を元に分類され、第Ⅰ総合分科：物性、第Ⅱ総合分科：組織、第Ⅲ総合分科：力学特性、第Ⅳ総合分科：材料科学、第Ⅴ分科：材料プロセッシング、第Ⅵ総合分科：工業材料、第Ⅶ総合分科：教育・環境・新領域、となっていた。これが2001年には、イノベーションを意識し、出口志向の分類に大きく変更され、第1分科：エネルギー材料、第2分科：エコマテリアル、第3分科：電子・情報材料、第4分科：生体・福祉材料、第5分科：社会基盤材料、第0分科：教育・環境・新領域、となった。この分類をさらに応用・萌芽領域と基礎物性・プロセス領域に分け、基礎物性・プロセスの中にそれまでの分科のキーワードとなっていた学術的な現象に関するキーワードが並べられた。2013年には57代西田稔(九大)委員長により、革新的な材料の開発に不可欠な学理・現象・プロセッシング別のセッションの充実を図るとともに、材料別セッションとのバランスを現状よりも配慮して、分科の分類はそのままに、セッションの再構築のみを行った。特に、企業研究者・技術者の要望に応じるため、材料別セッションとそれらを横断する学理・現象・プロセッシング別のセッションに分類して再構築する方針に基づき、再びセッション改編が行わ

れた。

しかし、金属・材料の基礎を横断的に議論するという本会の特徴であり重要な役割を果たしにくくなっていったため、本会の本来の特徴である基礎・プロセス・材料に共通する研究議論の場を復活させるべく、2016年から2019年にかけて59代 杉本論(東北大)委員長により再び再編が行われた。分科を分野と呼び替え、9つの大分類に分け、その中に中分類、セッションキーワード、さらに詳細なキーワードを設置した。立場の異なる研究者・技術者にとっても魅力があり、討論の活発化を目指して、第1分野：材料と社会、第2分野：物性と電気・磁気関連材料、第3分野：組織・計算科学、第4分野：力学特性、第5分野：材料化学、第6分野：材料プロセッシング、第7分野：生体・医療・福祉、第8分野：構造材料、第9分野：エネルギー関連材料と分類し、現在に至っている。

講演大会のプログラム編成は講演大会企画委員会で行われ、以前は会議室に集まり、講演タイトル、発表者、講演概要が書かれた紙を見ながらセッションごとに講演タイトルの紙を貼り付け、座長を決定していった。最後に、座長の重複が無いか、講演申し込み数とプログラムの講演数が合うかを確認し、合わない講演数が合うまでミスを探す。これらの作業はほぼ1日かけて行っていたが、事務局の工夫によりだんだん短時間で行えるようになっていった。2016年からはWebを使ったプログラム編成となり、空いている時間に効率良くプログラム編成ができるようになったものの、各分野の委員が集まって議論しながらプログラムを編成する楽しみがなくなってしまったのは少々残念である。

最近の講演大会では、会員にとってより魅力的な大会とするために、分野間で協力したセッション企画や、テーマを最先端のホットな話題に焦点を当てた公開シンポジウム、企画シンポジウムなどの企画が多数行われている。また、杉本委員長の下で開始した自動車技術会との合同セッションや、韓国金属学会との国際セッション、アメリカ TMS との間で行われる Young Leader 派遣など、他機関との連携企画も盛り沢山である。

講演大会での講演数は、秋期大会では1000件を超えていたのが(図1)、会員数の減少とともに、2014年辺りから1000件を切るような状態が続いていた。しかし、上記に示すような委員会の努力により、2017年には再び1000件を超える講演数になっている。春期大会は2010年以前の講演数が1000件を超えていたのに対し、2012年(2011年は中止)以降は700-800件で推移している。聴講者数については、秋期

* 東京大学大学院新領域創成科学研究科

開催地	年	回	講演数	参加数	一般	学生
	1988	102	781	1,646		
		103	1,043	2,012		
	1989	104	852	1,813		
		105	1,088	1,568		
	1990	106	881	1,682		
		107	1,081	1,857		
	1991	108	920	1,801		
		109	1,158	1,584		
	1992	110	895	1,787		
		111	1,308	1,898		
	1993	112	1,008	1,778		
		113	1,256	1,898		
	1994	114	1,048	1,732		
		115	1,281	1,735		
	1995	116	1,093	1,774		
		117	1,296	1,433		
	1996	118	991	1,616		
		119	1,259	1,644		
	1997	120	996	1,708		
		121	1,248	1,727		
	1998	122	1,069	1,794		
		123	1,327	1,798		
	1999	124	1,155	1,786		
		125	1,461	1,953		
	2000	126	1,160	1,798	1,210	549
		127	1,343	1,875	1,158	717
	2001	128	1,195	1,794	1,172	622
		129	1,383	1,797	1,102	695
	2002	130	1,256	1,882	1,242	640
		131	1,409	1,937	1,278	659
	2003	132	1,127	1,884	1,371	513
		133	1,577	1,986	1,266	720
	2004	134	1,244	1,913	1,315	598
		135	1,443	1,912	1,214	698
	2005	136	1,146	1,809	1,258	551
広島		137	1,354	1,873	1,243	630
新潟	2006	138	1,211	1,783	1,228	555
		139	1,212	1,743	1,005	667
岐阜	2007	140	1,244	1,881	1,248	559
		141	1,174	1,856	1,111	661
2008		142	1,058	1,725	1,125	518
熊本		143	1,233	1,738	998	662
2009		144	1,086	1,704	1,125	479
京都		145	1,322	1,927	1,180	747
2010		146	1,037	1,640	1,292	146
札幌		147	1,277	1,746	1,034	712
		148	951	0	0	0
沖縄		149	1,497	1,890	1,037	853
2012		150	763	1,350	888	391
愛媛		151	1,055	1,519	777	666
2013		152	832	1,391	923	396
金沢		153	1,016	1,511	803	626
2014		154	825	1,425	923	373
名古屋		155	960	1,496	811	587
2015		156	721	1,322	834	397
福岡		157	915	1,375	716	561
2016		158	755	1,390	854	441
大阪		159	926	1,470	773	597
2017		160	689	1,240	864	394
札幌		161	1,139	1,616	950	668
2018		162	735	1,286	859	387
仙台		163	1,037	1,655	1,045	610
2019		164	680	1,273	900	373
岡山		165	1,048	1,706	1,081	625

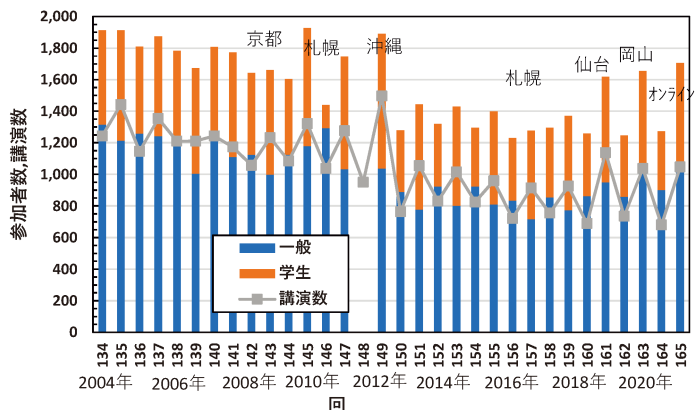
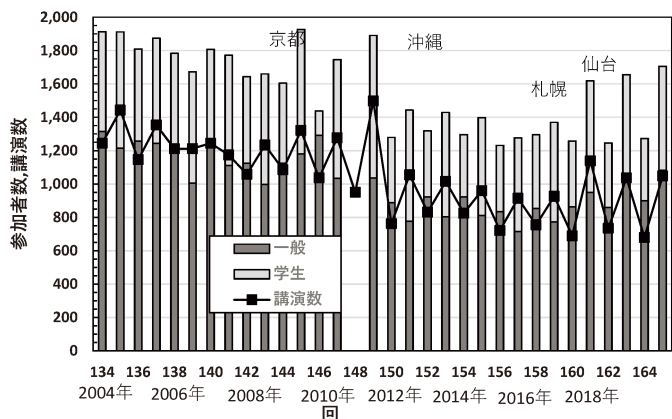


図1 参加者数、講演数の推移。(オンラインカラー)

大会で1500人程度、春期大会で1300人程度を推移している。秋期大会は北海道、東北、関東、東海、北陸信越、関西、中国四国、九州の各地区を順番に回って開催しており、開催地によっても聴講者数は変化する。1995年12月12日～15日にはハワイ・ホノルルのヒルトン・ハワイアン・ビレッジで講演大会を開催したときには、講演数1,296件、参加者数1,433名であった。2011年の春期大会は、東日本大震災のため中止となった。このような事態は、本学会史の中で初めてであった。学会事務局がある仙台的被害が甚大であり、学会活動が心配されたが、事務局の努力により徐々に事務局

の機能は回復していった。また、この年の秋期大会の担当は東北大であり、東北大も甚大な被害を被っていたが、偶然にも、新しい試みとして、従来担当大学で開催していた講演大会を国際会議場を利用する方式として企画していたため、2011年の秋期大会は台風を避けた11月に沖縄で開催された(図2)。講演数は1497件、聴講者数は1890人と、過去最多講演数1576件(2003年・北大)、過去最大聴講者数2012名(1988年・阪大)に匹敵するものであった。2013年の金沢での講演大会では、台風が直撃し、航空機、鉄道が運行停止となり、大会前日に開催される講演大会委員会にほとんどの委

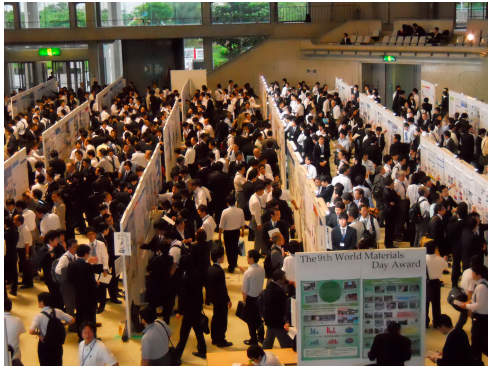


図2 2011年沖縄大会でのポスター発表。(オンラインカラー)



図3 第1回(2005年)託児室 学内をお散歩中(広島大学にて).
(オンラインカラー)

員が出席できない事態となった。多くの参加者が、台風の移動とともに動き始めた鉄道を乗り継いで、大会前日の夜中の到着となった。この時に、災害時における大会運営の判断や会員への連絡法について検討が行われた。2016年の大阪開催時にも台風に見舞われるなど、講演大会が気候に影響を受けることが多くなってきた。2020年にはコロナ禍の影響で、本学会史上初めて感染症による大会の開催中止という判断を行った。私自身が2019年度に講演大会委員会の副委員長、2020年度から委員長であったため、講演大会に与える感染症の影響の大きさを目の当たりにした。正直なところ、2020年1月頃には、感染症で大会が開催できなくなる事態に追い込まれるなど想像もしていなかった。2020年秋期大会はオンラインでの開催となったが、これについても、当初は開催できるとは全く想像できず、他学会でそのような話が上がっているのを半信半疑で聞いていた。初めてのオンライン開催ということで講演件数は718件と減少したが、聴講者は1369名で、これ以前の秋期学会よりも若干減少した程度であった。実際に開催してみると、講演スライドがよく見えて、講演がクリアに聞こえること、異なるセッションの移動が楽であること、人気ある講演で聴講者数が多くても、オフィスから座って聴講できることなど、メリットが多いことが分かった。高校生によるポスターセッションも、それ以前の参加者は開催地付近の高校生に限られていたが、オンライン化に伴い地理的制約が解消されたことにより発表件数が増え、高校生にとってもメリットがあることが示唆された。講演大会アンケートでも、大会参加者はオンライン開催に概ね満足したという結果になった。一方で、学会の醍醐味である人との交流ができない点に不満を抱く参加者も多かった。2021年春期大会では、オンラインでの交流会も試みた。参加人数は多くはなく、うまく話ができずに退出した会員も多かったが、参加者はそれなりに交流ができたと思う。この原稿を書いている2021年7月現在、コロナ禍が始まった当初は予想していなかったが、未だコロナ禍が続く状況下で東京

オリンピック開催を迎えようとしている。感染者数が十分に減少しない中、ワクチン接種が始まったことによる感染拡大鎮静化への期待感もあるが、残念ながら9月の講演大会は再びオンラインでの開催となった。7月時点で鉄鋼協会は対面開催を目指しており、日本金属学会とは開催日も開催形式も異なる別開催となった。これまでも、日本金属学会の記念行事としてハワイや沖縄で開催されるときは鉄鋼協会と別であったし、また春期大会においても会場の関係で別開催になったことはあるが、今回は感染症に対する対応の違いでの別開催となった。当学会の個々の講演大会を振り返っても、それぞれの時代の世相の影響を様々に受けてきたことが見て取れる。

個人的な話になるが、私が旧分科会に関わったのは2005年頃と記憶している。当時の第0分科「教育・環境・新領域」に参加し、材料が社会に与える影響についての企画を行った。2011年には東日本大震災による福島原子力発電所事故を受け、放射性物質やその取り扱いに関するシンポジウムを開催した。また、材料教育に関するシンポジウムや、材料リサイクルなどの環境問題に関するシンポジウムも開催した。学会における男女共同参画活動の重要性についても議論され、男女共同参画委員会が設置された。男女共同参画のセッション企画やシンポジウムを行い、2009年からは、講演大会の昼休みに昼食をとりながら、金属分野出身者のキャリアの積み方や子育ての話などを聴くランチョンミーティングを行っている。2011年からは、女性会員のネットワークを作るために、大会期間中に女性会員のつどいの会を開催している。また、2005年に講演大会中の託児室が初めて設置され、広島まで子供を連れて行って大会に参加したことは、個人的に印象に残っている(図3)。

最後に、この記事を書くに当たり、事務局の皆様、退職された斎藤智士氏から情報をいただいたことに感謝いたします。

(2021年7月12日受理) [doi:10.2320/materia.60.584]